17 外陰の皮膚掻痒症に対する漢方の治療経験

二宮レディースクリニック
二宮　典子

【緒言】

泌尿器科の外来診療では、多くの皮膚疾患を診察する。中でも外陰皮膚掻痒症状を訴える女性患者は比較的多い。

明らかな感染症がない場合は、ステロイド外用薬・保湿剤・鎮痒剤などを使用するが、中には難治性のものやすぐに再発し治療に難渋することも多い。

今回、外陰皮膚掻痒症に対し黄連解毒湯を処方し、掻痒のコントロールを得た症例を経験したので報告する。

【症例】

34歳女性。主訴は繰り返す陰部掻痒。

X年8月より陰部の掻痒があり、近位皮膚科を受診。外用薬と生活習慣指導をうけ症状はいったん収まるがすぐに再燃するため、婦人科を受診。カンジダ外陰炎の診断で抗真菌薬の外用薬と腟錠を処方されるが無効。治療を希望しX年11月に当院を受診。

受診時の外陰所見；大陰唇が左右ともに肥厚、苔癬化所見あり。一部は患者自身の掻把による浅いびらんを認めた。痒みを感じるとイライラし、精神的なストレスを感じると痒みが増悪すると訴える。

腟培養で黄色ブドウ球菌を認めた。カンジダ真菌は認めなかった。繰り返す外陰掻痒症に対し、1週間ベタメタゾンの外用塗布を指示し、プロアクティブ療法とした。翌週はヒドロコルチゾンにダウングレードとした。

しかし1か月後の再診で、皮膚病変はほぼ認めないものの夜間にかゆみを自覚し、無意識に外陰を掻把してしまうとの訴えがあった。そこでツムラ黄連解毒湯２．５ｇを就寝前に開始した。黄連解毒湯処方後は、すこし痒みを感じてもイライラしなくなり、寝ているときの耐え難い痒みが消失した。痒みを感じるときは黄連解毒湯の内服を継続し、現在も経過良好である。

【考察】

皮膚掻痒症は皮膚そのものを治癒させることに重点が置かれる。しかし掻痒を感じた時のイライラを改善する西洋薬は存在しない。今回われわれは、皮膚掻痒を自覚するときの皮膚の熱感および精神的なイライラを治療する目的で身体的な清熱作用と、精神的な安定作用の両者を併せもった黄連解毒湯を選択し有効であった。

【結語】

難治性の外陰掻痒症に対し黄連解毒湯は有効である可能性がある。